

『續紅樓夢』考

— その「先行作品」との関係及び作風について —

藤田尚代

〔抄録〕

『續紅樓夢』は嘉慶四年（一七九九）に抱甕軒から出版された『紅樓夢』続書の一つである。本稿の目的は『續紅樓夢』とはどのような性格の作品なのか、「先行作品」（『紅樓夢』、『後紅樓夢』）との関係及びその作風の解明、その文学的限界などについて考察するものである。

一、『續紅樓夢』について梗概、秦子忱について、版本の紹介。
二、「前作」との関係を交えて、『續紅樓夢』が執筆されるに至った経緯について。三、『續紅樓夢』の作品構成について（一）人物設定、（二）空間設定。四、『續紅樓夢』の作風、その調和団円への指向と読者協力の予想、そして諧謔性と“軽み”について、

以上四つに分けて考察している。

秦子忱には、続書とは前書に続くもので、妄りに増やしたり削り取るべきものではないという考えがあり、それ故『紅樓夢』の人物や逸話を『續紅樓夢』に取り出し、あえて『紅樓夢』の枠に留まり意識的に踏み越えないようにした。『續紅樓夢』は寶玉・黛玉の情縁を成し遂げることを本筋として、『紅樓夢』での矛盾を調和し、小さな逸話を取り上げ、諧謔性を織り交ぜることで本筋を彩った作品だと考える。

キーワード…『續紅樓夢』、『紅樓夢』続書、秦子忱

はじめに

中国小説史を巨視的に見渡すと、明末の通俗文芸愛好家である馮夢龍が「四大奇書」と称した『三國志通俗演義』、『西遊記』、『水滸傳』、

『金瓶梅』が明末に出揃い、一方、曹雪芹が心血を注いだ『紅樓夢』が清初の乾隆初年に書かれている。

この後、何故か「四大奇書」や『紅樓夢』に相当する作品が創作されてゆくという流れではなく、むしろそれらの続作が陸続として作ら

れていく。

主たる続書を挙げるならば、萬曆三十七年（一六〇九）に出た西陽野史作『三國志後傳』十卷百四十回、その後丁野鶴作『續金瓶梅』十二卷六十四回が順治十七年（一六六〇）、陳忱作『水滸後傳』四十回は康熙三年（一六六四）、無名氏作『続西遊記』百回は同治七年（一八六八）にそれぞれ出版されている。『紅樓夢』の続書に至っては、おびただしい作品が作られるが、乾隆末年に作られたとおぼしき逍遙子作『後紅樓夢』が、続書の最も早いもので、次いで今回とりあげる秦子忱作『續紅樓夢』がこれに続く。

では何故「四大奇書」『紅樓夢』に続いてこれらに相当する傑作が新たに作られずに、それぞれの続作が作られるという方向に向かったかが問題となる。今、筆者が考えている所を述べるならば、詩において唐・宋がピークとなり元以降のそれが過去の詩の典型を祖述するに至ったように、「四大奇書」などが出現した明末清初が白話長編小説の一つのピークであり、それ以降の展開は「四大奇書」や『紅樓夢』という典型を祖述する方向に進んだ。その結果が恐らく続作という形となつて現れたのであらうというもののだが、このテーマは大問題なので今回は暫らくおくとして、本稿では『紅樓夢』第二の続書たる秦子忱の『續紅樓夢』に関し、この小説が書かれた経緯やその作風の解明などを通じて、この小説が一体どのような性格の小説なのかを明らかにすることを主たる目的とする。

ところで副題にかかげた「先行作品」とは『續紅樓夢』より前に存在し、作者秦子忱がそれを見てこの小説を書いたと思われる『紅樓夢』

百二十回と続書『後紅樓夢』三十回の両書を指す。以下『紅樓夢』を「前作一」、『後紅樓夢』を「前作二」と略称することにした。

尚、『紅樓夢』続書に関する主なる研究としては、これまでに林依璇氏の『無才可補天——《紅樓夢》續書研究』⁽²⁾と趙建忠氏の『紅樓夢續書研究』⁽³⁾等がある。

（一）『續紅樓夢』の梗概

まず、『續紅樓夢』の梗概から見よう。話は「前作一」九十八回の黛玉の死から始まる。

黛玉は死後、太虚幻境へと帰り、先に亡くなった金釧兒・晴雯らに出迎えられる。香菱は亡くなり太虚幻境へ帰る途中、父、甄子隱に会いわが身の境遇を知る。その他にも太虚幻境には元妃（元春）・迎春・秦可卿・王熙鳳・尤二姐・尤三姐・鴛鴦・妙玉らが戻ってきており、しばし逍遙の日々を送る。

一方、地府で賈母は焦大を供にして、林如海・賈敏・賈珠らに会う。林如海は亡くなった後、酆都城の城隍爺（冥土の裁判官）に任じられていた。賈母・賈敏らはこれまでの人界の様子、地府に来てからの様子を互いに話し再会を喜び合うが、黛玉がすでに亡くなったことを知りその行方を捜す。

元妃は賈母が亡くなったことを聞き、鴛鴦・王熙鳳・尤三姐を地府に遣わして賈母を探させた。鴛鴦・王熙鳳らは林如海の命を受けて黛

玉を探していた司棋・鮑二の妻に会い、皆そろって酆都城へもどり、そこで賈母・賈敏らは黛玉が太虚幻境にいる事を知る。

寶玉は試験場で行方がわからなくなった後、茫茫大士・渺渺真人のもとで柳湘蓮と共に修行していた。あるとき甄子隱がやってきて宝玉に黛玉が太虚幻境に居ることを告げ、法術をほどこして寶玉と柳湘蓮を太虚幻境へと送る。さらに寶玉は黛玉との結婚を林如海に許してもらう為、地府へと向かう。寶玉は地府の料理屋で賈珠・秦鐘に会い、また林如海に会って黛玉との結婚を許してもらう。

林如海が任期を終えて、天曹に赴く途中、太虚幻境に行き寶玉・黛玉の結婚をとりおこなう。また、これより先に地府では王熙鳳によって結婚を妨害された張金哥とその夫の結婚、そして馮淵が賈金桂を妾にする一件があり、その後林如海に同行する。

賈母は賈政の夢に、妙玉を除く元妃・迎春・黛玉・王熙鳳・秦可卿・香菱・尤二姐・尤三姐・晴雯・金釧兒・瑞珠ら十一人が生き返ろうとしていることを話し、亡骸の回収を告げる。そして賈母の話しどおり期日が来ると、十一人の魂はそれぞれとの体に戻り生き返る。

林如海は城隍爺に任じられて、林如海・賈敏・賈母・賈珠らは城隍廟に住むことになり、これ以後賈家の人間が城隍廟にやって来て、林如海たちとたやすく交流できるようになる。

賈蘭・賈環たちも結婚し、史湘雲の夫も生き返って林如海の後継ぎとなる。迎春の夫・孫紹祖と賈環は僧・道によつて、もともと品性よろしくない人物であったが善良な人間になった。

寶玉は寶釵・黛玉、晴雯・紫鵲・金釧兒・鶯兒らの妻妾に囲まれて

仲むつまじく楽しく暮らす。官職も翰林士となり、元妃は二度省親する。

林如海は新たに天曹の役職に赴任することになり、賈母は天に昇天して賈代善に会う。途中、寶玉らは太虚幻境まで見送りに行き、そこで「太虚幻境」が「太虚仙境」に、「離魂天」が「補魂天」に、「薄命司」が「鐘情司」と改名されていることを知る。ここにおいて大団円で物語は締めくくられる。

(二) 秦子忱について

『續紅樓夢』の作者・秦子忱については大変遺憾ながらその大半は不明である。明らかになっていることを以下に述べるならば、号は雪塢、隴西の人で、室名を百甕軒と⁽⁴⁾いった。また『續紅樓夢』の「序」⁽⁵⁾によれば「雪塢、秦都閩、以隴西世胄」とあり、秦子忱がもとは隴西の人で後に山東へ行き兗州都司（正四品の武官）をしていた事があった⁽⁶⁾ということである。都司は、位は参将につぐ下級軍職である。

ここで注目されるのは武人が小説の作者だったということである。筆者はこれ以外に武人の小説作者を寡聞にして知らない。恐らくこの秦子忱は、いわゆる紅迷の一人だったと思われる。

(三) 『續紅樓夢』の版本について

『續紅樓夢』の最も古い版本は抱甕軒より出版されたもので、その詳細については以下のとおりである。

一七九九年 嘉慶四年 抱甕軒本

見返し「嘉慶己未新栞、續紅樓夢、抱甕軒」、鄭師靖の「序」あり

譚渫の「題詞」あり、秦子忱の「續紅樓夢弁言」、「題詞」あり

「續紅樓夢凡例」六條、「續紅樓夢目錄」三十卷

この後、幾度も出版されたが以下にあげるのはその一部である。

一八八一年 光緒七年 聚珍堂本 活字印

一八八二年 八年 抱甕軒本

一八八二年 八年 經訓堂本

一八八八年 十四年 善友堂本

一九二〇年 上海江東茂記書局本 石印

一九二一年 上海大成書局本 石印

『紅樓夢續編』

尚、本稿は一九九〇年上海古籍出版社《古本小說集成》第二批、

『續紅樓夢』三冊を底本としたことをお断りしておきたい。

二

では次に、『續紅樓夢』が書かれるに到った経過について述べたい。

秦子忱はなぜ『紅樓夢』続書を書いたのか、その動機を探るとしはば「前作」に対する不満が窺える。

(一)『續紅樓夢』執筆にいたる経過

秦子忱が『續紅樓夢』を執筆するにいたる経緯についての文章が

「續紅樓夢弁言」に次のようにある。

於寶・黛之情緣終不能釋然於懷、夫以補天之石而仍有此缺陷耶！公暇、過東魯書院、晤鄭藥園山長、偶及其故。藥園戲謂曰：「子盍續之乎？」余第笑而領之、然亦不過一時之戲談耳。

迨藥園移席於滕、復致書曰：「『紅樓夢』已有續刻矣、子其見之乎？」余竊幸其先得我心也。因多方購求、得窺全貌。見其文詞浩瀚、詩句新奇、不勝傾慕。然細玩其叙事處、大率於原本相反、而語言聲口亦與前書不相吻合、於人心終覺未愜。

余不禁故志復萌、戲續數卷以踐前語。

この文章は、秦子忱が病になり休暇を申請して療養中に、同僚から『紅樓夢』を借りて読み、氣を紛らわす事にしたという話から、上記に引用したような『續紅樓夢』の執筆に至った経過に話が及んでいる。ここで述べている「藥園」とは『續紅樓夢』の「序」を書いた鄭師靖のことで秦子忱とは非常に親しい関係であったと考えられる。

また「續刻」については、『續紅樓夢』以前に出版されているものは「前作二」だけである。『續紅樓夢』と同じ年に出版された続書は他に『綺樓重夢』、『紅樓復夢』があるが、「前書二」が『續紅樓夢』中に頻繁にその書名のみならず内容に至って述べられているのに比べ、『綺樓重夢』、『紅樓復夢』について書名すら挙げられておらず、秦子忱が『綺樓重夢』、『紅樓復夢』を知っていたとは考えにくい。したがって「續刻」とは「前作二」のことだと考えて差し支えないと思

われる。

この「續紅樓夢弁言」では秦子忱が「前作一」を読んで続書を書くには至らなかったけれども不満を抱いていたこと、そして「前作二」を読んで納得がいかに反発し、続書を書くに至ったことを述べている。では、「前作一」と「前作二」の如何なる事柄が秦子忱に続書を書かせたのか次で詳しく述べたい。

(二) 秦子忱の「前作」への不満

秦子忱が『續紅樓夢』を書いた一番の動機は、「前作一」が悲劇小説だからであろう。特にその主人公である賈寶玉と林黛玉が結ばれなかった事が大きいと思われる。そのことは「續紅樓夢弁言」の「於寶・黛之情緣終不能釋然於懷、夫以補天之石而仍有此缺陷耶！」からも明らかである。

これは「前作一」の寶玉と黛玉の情緣について納得していないことを表している文章である。しかしこれだけでは秦子忱が筆をとるには至らなかった。藥園の「君はどうして続きを書かないのか？」という問いに對して、秦子忱は笑って領いたが、一時の冗談に過ぎなかったと述べている。「前作一」における寶玉・黛玉の情緣の結末に納得していなかったものの、続きを書くという行動に出るまで秦子忱の心を動かすことはなかったのである。

秦子忱が具体的に執筆を決心したのは「前作二」を読んだ後の事である。「然細玩其叙事處、大率於原本相反、而語言聲口亦與前書不相吻合、於人心終覺未愜。」とあるのがまさに『續紅樓夢』を書いた動

機といえるだろう。もちろん、「前作一」が悲劇小説であることに對する不満が根底にあつての「前作二」に對する不満である事は言うまでもない。

「前作二」についてはこの「續紅樓夢弁言」の他でも秦子忱が述べている箇所がいくつかある。「凡例」に次のような文章がある。

『後紅樓夢』書中、因前書卷帙浩繁、恐海内君子或有未購、及已購而難於携帶、故又叙出前書事畧一畧、列於卷首、以便參考。鄙意不敢效顰。蓋閱過前書者、再閱續本方能一目瞭然；若前書目所未覩、即參考事畧豈能盡知其詳。續本縱有可觀、依舊味同嚼蜡、不如不叙事畧之爲省筆也。

これは「前作二」にある「後紅樓夢摘叙前紅樓夢簡明事畧」（以後「簡明事畧」と略す）に對して秦子忱の意見を述べたものである。「簡明事畧」には、「前作二」の作者・逍遙子が「前作一」のあらすじを簡単に述べたものとしているが、實際には「前作一」の話を改竄し、「前作二」に続けやすいように逍遙子自身が書きかえたものである。例えば「簡明事畧」の中に、

黛玉機警而辨、熙鳳竊畏之矣、使偶寶玉必反家政也。適王夫人之姊薛姨攜其女寶釵來、有麗色又柔訥而下人。熙鳳心竊喜、以爲王夫人之姨女也、是可惑寶玉而逐黛玉、惟我計耳、乃浸潤抑揚於史太母、王夫人。

とある。王熙鳳は黛玉が賢い事を恐れ、宝玉と結婚させたならば必ず家政は自分から黛玉へと移ると考えて、宝釵が美人でおとなしく人にへりくだる性格のため、これを喜び宝玉を誘惑させ、黛玉を追い払おうとした、とあり逍遙子は「前作一」の王熙鳳を完全に悪者に行っていることが窺える文章である。また、

遂有僧、道與寶玉往來、以談道惑誘寶玉。寶玉屢欲遁跡、輒爲家人阻留。至是賈政出使、寶玉攜賈蘭赴秋試、寶玉既出闈、遂遁去。(中略) 寶玉本富貴子弟不習苦、又悟僧、道之蠱也。適遇賈政於毘陵驛乃自歸、政驚喜攜歸。

とあるのは宝玉の出家は僧、道に惑わされていたものだったとして、毘陵驛で賈政に会い共に帰っていったと述べているのは紛れもなく逍遙子が改竄したものである。これらに対し『續紅樓夢』「凡例」の「鄙意不敢效顰。蓋閱過前書者、再閱讀本方能一目瞭然；若前書目所未覩、即參考事畧豈能盡知其詳。」は秦子忱が逍遙子のそうした行いを批判したものだと考えられる。

また『續紅樓夢』第三十卷に次のような文章がある。

寶玉道：「(略) 我推開菴門看時、原來就是和老爺聯過宗的那個賈雨村、和一個什麼空空道人。他兩個見我推門進來、俱各大喜道：「你來的正好。你當日的那部『石頭記』、原是我兩人煩曹雪芹先生編次校定的。至於你們後來的這一段因果、又有一個朋友

託曹雪芹替你編了一部『後紅樓』。你且坐下瞧瞧、合你的意思不合？」於是、讓我坐下、從案上取出一部書遞與我看。我接了過來、從頭至尾閱了一遍。那裏是曹雪芹的手筆？語言口吻全然不像、甚不合我的意思。」(中略) 寶玉道：「節目太多、也記不得了。只恍惚記得是從南方來了林妹妹的一個哥哥。」黛玉失驚道：「我那裏有什麼哥哥呢！」寶玉道：「還不止單是你哥哥、還帶着一個朋友來了、叫個什麼姜景星。一到家裡、聽見你的才貌、他就大動了心。後來他一心兒要聘你、你哥哥也願意給他、你自己也願意嫁他。」(中略)

黛玉紅了臉道：「依你這樣說來、偕們後來的這一段因果、竟要由他說壞、是不能更改的了麼？」

ここでは、宝玉と黛玉らの会話の中で「前作二」について話しているものだが、「これは曹雪芹の手筆だろうか？言葉がまったく違うし、甚だしく私の考えに合わない」と「前作二」を批判し、また林黛玉の兄が南方からやってきた事、またその兄が姜景星という友人を連れてきて黛玉と結婚させようとした事、など「前作二」の具体的な話が述べられ、そして「前作二」の作者・逍遙子が新たに設定した人物・林良玉や姜景星といった人物はでたらめで、改める事はできないのかと述べている。これは逍遙子が新たに登場人物を作った事へ秦子忱が異議を述べていると考えられる箇所である。登場人物設定については、後に詳しく述べることにする。

このように秦子忱には「前作二」に対して同意しかねる箇所がいく

つもあり、それが「前作一」への不満と融合して執筆にいたったと考えられる。また「前作二」の改竄したこと、また登場人物を新たに設定した事などに秦子忱は反発しているのであるが、では「前作二」へのそうした反発をふまえた上で『續紅樓夢』の構成、作風はどういったものであったのかを考察していきたい。

三

以上見てきたように秦子忱が『續紅樓夢』を執筆するに至ったのは「先行作品」に対する不満からであったことが判明した。

では次に秦子忱が自作の『續紅樓夢』においてどこをどのよう⁽⁸⁾に改め、この不満を解消したかを作品における人物設定と空間設定の両設定に見られる工夫から見てみよう。

(二) 人物設定

そもそも「前作二」は「前作一」に対する不満から作られたものであった。事の順序としてまずこの点について見てみよう。この点に関してすでに拙稿⁽⁸⁾があり、おおよその所は発表した⁽⁸⁾が、今その要点をいくつか、その中で『紅樓夢』何以作？爲賈寶玉、林黛玉夫婦作也」と述べているように、なによりも『紅樓夢』は賈寶玉と林黛玉とが最終的に結ばれ大団円で終わる小説でなければならぬと考えていた。まづ以って賈寶玉の意に反して薛寶釵と結婚し、黛玉と死別することに

なっている「前作一」の結末には大いなる不満をもっていたのである。そこで逍遙子は作品冒頭で、一度死んだはずの黛玉を強引に蘇生させ寶玉と結ばせようとし、逆に寶玉、黛玉の二人にとって都合の悪い人物は登場させないことにしている。例えば「前作一」において寶玉と黛玉の仲をさいた王熙鳳は最後まで蘇生できずに作中終始登場しないことになっている。同時に「前作一」に見られなかった新しい人物を相当登場させている。例えば、

林良玉・姜景星・王元・林如岳・龍夫人・蔡良・趙之忠・單昇・吳祥・林柏年・楊周兎・汪福・喜鳳・李瑤・墨琴

など多数いる。上記の新登場人物をみると極端に林黛玉の血縁関係にあるもの、もしくは主従関係にあるものが多い。例えば林如海夫婦に育てられた林良玉（黛玉の従兄弟にあたる）、林良玉が幼い時に亡くなった両親の林如岳と龍夫人、さらに林家に先代から仕えている老僕⁽⁹⁾の王元などが挙げられる。

「前作一」では林黛玉は賈家においては身寄りがなく、その為に薛寶釵と比べややもすれば不利な立場にいたが、この「前作二」において逍遙子がこのような黛玉の血縁関係の登場人物を多数補う事によって、黛玉の賈家における地位を安定させ、しいては高めさせることをはかったものと思われる。

さて、では秦子忱は、続作における人物設定に関しどのように考えていたのだろうか。すでに述べたように秦子忱は「前作二」に見られる新人物設定に対して批判的であった。この考えは『續紅樓夢』冒頭に掲げられた次の「凡例」によく表れている。

書中所用一切人名・脚色、悉本前書内所有之人。蓋續者續前書也、原不宜妄意增添。惟僧道二人、在大荒山空空洞洞焚修、若無童子相應、似屬非宜、故添出一松鶴童子。此外、悉仍其舊。

つまり、いくら続作とはいえ、逍遙子のように続作者の都合で勝手に新たな登場人物を設定してはいけなと述べているのである。『續紅樓夢』第三十巻で寶玉が「前作二」のことを紹介して、黛玉には南方から一人の兄（林良玉を指す）がやってくるようになっていとうと、黛玉は「我那裏有什麼哥哥呢！」と言っているのも秦子忱の「前作二」における新登場人物設定に対する批判といえる。

秦子忱は何故、続作で新しい登場人物を設定してはいけなと述べているのだろうか。「凡例」やその他のどこにもその答えは書いてないが、恐らく、いくら続作とはいえ無制限に新登場人物を設定する事によってストーリーが原作から離れていくことを自ら戒めたものと思われる。

(二) 空間設定—人界・地府・太虚幻境

秦子忱は「前作一」の人物設定にこだわり、その結果「前作二」のような安易な新登場人物の設定に批判的であったが、逆にすでに見たように「前作一」のような寶玉と黛玉を死別させることには納得がでなかつた。最終的には「前作二」と同じように寶玉と黛玉とを結婚させ、結末を大団円で締めくくったのである。

ところが『續紅樓夢』において寶玉と黛玉とを再び一緒にさせるに

しても、一方は行方不明、そして一方はすでに亡くなっている。また「前作二」では黛玉以外の主要人物の多くが亡くなってしまつて、彼等の死後のことは絶えて描かれることはなかつた。

このような条件の下で、秦子忱は寶玉と黛玉とを結婚させ、しいては賣家を再興させ大団円で終らす方法として「死者の復活」を考えだした。ここで述べる「復活」とは「生き返る」ことではなく、「前作一」で亡くなった人物の『續紅樓夢』中への再登場」のことである。

そもそも「前作一」中の多くの少女たちは元来、太虚幻境の仙女たちだった。そのために人界でなくなった彼女たちはもとの太虚幻境に戻るこゝとなつた。秦子忱はこの太虚幻境の仙女以外の人物を「復活」させる為に、この作品では新たに「地府」という世界を設定した。

つまり『續紅樓夢』では人界の他に太虚幻境と地府という三世界を設定し、かつこの三世界を、これを焚くと死者の魂を呼寄せ、生者と会わせることができるとする「返魂香^⑨」とこれを焚くと生者の夢の中で死者と会えるという「尋夢香」の兩種の香を用いて誰でも自由に三世界を往来できるようにした。

「前作一」で亡くなり『續紅樓夢』で「復活」した人物にどのようなものがあり、またどの世界に「復活」したかを挙げるならば、以下のとおりである。

I. 地府

史太君・林海如・賈敏・賈珠・馮淵・潘又安・司棋・秦鐘・張金哥・鮑二家的・賈瑞・趙氏

II. 太虚幻境（下線）は金陵十二釵

林黛玉・秦可卿・賈元春・賈迎春・王熙鳳・金釧兒・鴛鴦・尤二姐・尤三姐・晴雯・香菱・瑞珠

I. にはこの他に長安守備公子として崔文瑞と史湘雲の夫として林成玉が「復活」している。この二人は「前作一」にはっきりと名前が明記されておらず、その為に秦子忱が崔文瑞・林成玉と名づけたのであるが、「前作二」に明記されていない名前を新しくつけることに對して、注意書きをつけている。それは「凡例」の一つに見られるのであるが、以下にその文章をあげる。

前紅樓夢書中、如史湘雲之婿以及張金哥之夫、均無紀出姓名、誠爲缺典。茲本若不擬以姓名、仍令閱者茫然。今不得已妄擬二名、雖涉穿鑿、君子諒之。

この他に「前作一」で行方がわからなくなったり、生死がわからなくなるなどして途中から登場しなくなった人物で『續紅樓夢』に「復活」したものが数名いるがそれは以下のとおりである。

I. 地府

焦大・智能兒

II. 太虚幻境

妙玉

この三世界の設定は、この作品にどのような作用をもたらしているであろうか。まず、亡くなって太虚幻境という仙界に戻った者も、地

府という冥土に行った者も、その気になれば自由に一時的であれ永遠であれ人界に戻ってこれるということは、この作品ではすでに「死」は悲劇でなくなったことを意味する。その結果、「前作一」に見られたような重苦しい人界世界の宿命的生老病死や、人と人との怨恨、嫉妬などによる衝突などを描く必要があまりなくなり、全篇すっかり重圧感のないものになってしまった。後に説く「輕み」の作風がこれである。このことは次の『續紅樓夢』の作風の項で述べることにする。

四

「續紅樓夢」の作風について

(一) 調和団円への指向

しばしば述べてきたように『續紅樓夢』は「前作一」の悲劇的要素をきわめて取り除こうとした作品といえる。

まず、主要人物である寶玉・黛玉の大団円は秦子忱にとっては欠くべからざるものであったと考えられる。この他にも主要人物として金陵十二釵の迎春とその夫・孫紹祖や同じく金陵十二釵の史湘雲とその夫・林成玉を取り上げ大団円にしている。これらの「前作一」でも重要な役割を果たしてきた人物が『續紅樓夢』でも取り上げられ、その後を描かれることは当然考えられる事である。しかし秦子忱は脇役、しかも数回どころか一度話しにのぼっただけの人物にまでも取り上げて円満に締めくくっている。更には「前作一」で悪人として描かれ亡くなった人物たちをも『續紅樓夢』中取り上げることなく無視して抹

殺する事も可能であつたにもかかわらず「復活」させ、その後の一応の結末を描いている。『續紅樓夢』は徹底して「前作一」の悲劇要素を取り除こうとしている。

このことについては既に林依璣氏の説がある。⁽¹⁰⁾それは、『續紅樓夢』は主要人物の關係が調和のとれた類の続書であり、人と空間との矛盾・人と人との矛盾・人と価値観との矛盾を取り除き調和団円に導こうとした、というものである。

調和団円への指向については、『續紅樓夢』の作風の一つである、ということに止めておく。

(二) 読者の協力の予想

次に『續紅樓夢』の作風として取り上げるものは、(一) 調和団円への指向を踏まえたものである。『續紅樓夢』はその作品全体を通して調和団円への指向の強いものである。しかしそれは何も主要人物に限ったことではない。脇役、しかも一度話に取り上げられただけのものに及んでいる。続書である以上「前作一」を読んだ上での作品である事は勿論だが、『續紅樓夢』のこうした「前作一」の些細な逸話を取り出して描く事は、かなり精通した読者を前提として執筆されたものと考えられる。

一言に脇役といつても様々で、例えば柳湘蓮と尤三姐のように、主要登場人物に極めて近い重要な役割の才子佳人や、崔文瑞と張金哥のように数回人の話にのぼつただけの才子佳人、はては賈芸と小紅、齡官と鶯兒、万兒と焙茗といった侍女たちの話まで取り上げているので

ある。

崔文瑞と張金哥の場合、「前作一」でこの二人は許婚であつたが、王熙鳳の妨害のために破談となつてしまふ。そのために張金哥は首を吊り、それを聞いた長安守備公子（崔文瑞）は川に身を投じて後を追う、という「前作一」十五、十六回の話があり、これが『續紅樓夢』では、張金哥は地府で史太君らに前世の不幸を打明け、許婚を探してもらう。後、崔文瑞と張金哥は林如海・賈珠らによつて再会し、結婚して林如海らに同行する事を許される、というのが『續紅樓夢』十二巻から十四巻の話である。その中には次のような場面が盛り込まれている。

例えば、王熙鳳が語る場面

鳳姐低声說道：「好姐姐、你悄着些兒、等我告訴你。那一年、我給小蓉大奶奶送殯之時、不是帶着宝玉、秦鐘在饅頭巷住過兩天麼、那時、老姑姑子和我商量着幹了一件没天良的事兒。有一個張卿宜、他有個女孩兒名叫金哥、原許聘了一個守脩的兒子。後來長安府知府的小舅子李衙內看見金哥美貌、也要聘了爲妻、這個守備家不依、打了官司。因我們家和雲節度家是親戚、老姑姑子求我和雲節度處說了、硬壓派着守備家退了親。誰知道這個女孩子守志不從、自縊而死、守備的兒子也是個情種、聽見金哥尋了死、他也尋了死。我自從作了這件事、活一日懸着一日的心。如今剛纔放了心、誰又知道纔剛兒大街上有一個女孩了拉住老太太的轎子喊冤告狀、我听見秦鐘說就是張家的女孩子、告的就是我。我想、這件事若教

姑老爺知道了、我這個臉可放在那裡呢？」（『續紅樓夢』第十二卷）

次に張金哥が許婚の名前を聞かれて答える場面。

賈珠道：「你丈夫可叫什麼名字？」張金哥道：「我不知他的名字叫什麼。」賈珠道：「可姓什麼？」金哥沉思了一會、道：

「大概姓崔。」賈珠听了笑道：「怎麼連自己丈夫的姓都不知道呢？還說大概姓崔。如此看來、你這張狀子多半也是謊的了。」金哥

發急道：「人家一個女孩兒家、給了婆家、怎麼好意思打聽丈夫的名姓呢？」賈珠笑道：「既不好意思打聽、怎麼又知道大概姓崔呢？」

金哥道：「這也有一個緣故、當日他家下聘之時、我哥哥就和我

撇着頑兒、我就急了、狠狠的啐了他一口。我哥哥：說「呸、你婆婆家姓崔。」所以我纔知道了。」說的衆人一齣都笑起來。馮淵道

：「如此說來更容易了、但凡姓崔的、他父親做過守條的就是你的丈夫了。」（『續紅樓夢』第十二卷）

崔文瑞と張金哥は「前作一」では悲劇的な逸話の一つに過ぎず、これ以後王熙鳳が買家でほしいままに振舞うことになった、そのきっかけとなった話の犠牲者、という役割であった。それが『續紅樓夢』で取り上げられ、張金哥が語り、名前すら無かった長安守備公子には崔文瑞という名前が与えられ大団円で二人の話はおさまりがつく。さらにはその話の途中で王熙鳳が当時の話を語り、さらには今の心境を話す場面や、張金哥が許婚の名前を聞かれて答える場面といったものが盛り込まれているのである。

『續紅樓夢』にはこのような「前作一」の逸話を取り出して、さらに詳しく描写したもの、また當時を振り返り「前作一」では語られ無かった事を付け加えたものや、その後日談といったものが多い。また時には「前作一」の注解かと思われる部分すら見られる。次にその一例をあげる。

薛寶釵が物思いにふける場面

寶釵回到房中、坐在榻上思前想後、不覺又傷起心來。自己想著：若說與寶玉無緣、怎麼又有金玉相配之驗；若說與寶玉有緣、怎麼又有個林妹妹在中間攪和着呢？又細想寶玉與黛玉他兩個那一番情分、所有在大觀園的人、那一個人都不知道呢、怎麼老太太、老爺、太太却不把林妹妹配他、偏又舍近而求遠的把我娶了來？如今弄的死的死了、走的走了、嫁的嫁了、閃得我有始無終的、臉上也見不得人了。（『續紅樓夢』第七卷）

これは秦子忱の考える、寶玉が行方不明になってからの薛寶釵がよく表されている場面だと思われる。「前作一」で寶玉にとり残された寶釵のその後の様子のみならず、その心情を描く事で、「前作一」で語られなかった事に対する秦子忱独自の解釈を加えている。

『續紅樓夢』はこういった「前作一」で語られなかった事、また悲劇のまま忘れ去られていった小さな逸話を取り上げている事が多い。これは「前作二」の「簡明事畧」のように未だ読んだ事のない読者のために大略を述べる、といった考えは全くなく、あくまで「前作一」

に精通している読者、いわば「紅迷」を対象にしている。言葉をかえて述べると『續紅樓夢』は「紅迷」の協力を前提にして書かれた小説であると言えることができる。

(三) 諧謔性と「輕み」の作風

これまで上述してきたように『續紅樓夢』では人と人とが衝突することなく、全てうまく調和されていくように話がすすむ。その結果「前作一」に見られるような人間の業、つまり病氣、死、恨み、嫉妬といったものや、人間社会の重圧、つまり封建社会における富貴な家のもつ重圧といったものを解き放つこととなった。

かわりに見られるのは諧謔性と「輕み」の作風である。『續紅樓夢』のいたるところに、じょうだん・むだ口といったものが見られる。「前作一」でも冗談を言いあう場面は描かれているが、それ以上に「前作一」では終始、暗雲が覆っていた。例えば第二回で榮・寧国邸はすでに見かけこそあまり変わらないが勝手もとの事情はすっかり乏しくなっている、とありまた、第五回では金陵十二釵の少女たちの未来を暗示しているが、それはいずれも暗いものであった。

このように「前作一」では悲劇への伏線がひかれていた、その中でこのじょうだん・むだ口であった。

しかし『續紅樓夢』では、「前作一」のそういった人間の業や人間社会の重圧を取り除き、矛盾や衝突を調和させてしまった。そのため諧謔性が前面に押し出される形となった。『續紅樓夢』には数多く面白みあふれるじょうだんやふざけが見られる。次にその一例をあげる。

金釧兒噙了個空兒、悄悄的揭開帳簾一看、只見宝玉、晴雯二人爛睡沉酣、推之不動、就和死人一般。忽然心生一計、忙走到鶯兒、紫鵲跟前、笑道：「姐姐們、你們瞧、前日晚上、二爺到鴛鴦裏的時候、晴雯這個蹄個、把鴛鴦們三人擺佈了一個倒地兒、我想鴛鴦們今兒也報他個仇兒解解恨、也是好的。」鶯兒笑道：「你有个什麼報仇的法兒、你且說說。」金釧兒笑道：「我想趁着奶奶們不在這裏、鴛鴦們把二爺和晴雯的衣裳都替他們脫的干干净净、蓋上一床被窩、枕上一個枕頭、再把他們的衣裳都藏過。過會子他們還了魂、摸不着衣裳、干急不能起來、鴛鴦們大家瞧着笑一陣子、這不報仇了麼？」(略)

此時、鶯兒早已心活了、便不由紫鵲做主、乃和金釧兒二人輕輕的揭起帳簾、先打開了破窩、安好了枕頭、然後嘻嘻的笑着、將他二人一個一個的抱了起來、將上下的衣服、一件一件的脫剥干净、重新放倒、枕上一個枕頭、蓋上一床錦被、臉對着臉兒、安置停妥、仍舊放下帳簾。紫鵲在旁看的也笑了。又怕天氣嚴寒、火盆裏多多的添起炭來。

剛然收拾完畢、只見宝釵、黛玉從外边走了進來。三人見了、一齊迎了出去。(略)

說着、二人走到裏間一看、只見一大盆炭火、紅焰騰騰。黛玉道：「房屋又不大、籠下這一大盆火、也不怕烟氣熏着了人。我們只剛走了、你們的新樣兒就上來了。」鶯兒、紫鵲不敢答言、只是抿着嘴兒笑。(略)

言还未盡、只見宝釵手揭着帳簾、笑道：「噯哟哟、這是怎麼

了？顰兒你快瞧來。」黛玉聽了，忙也走來一看，便笑的岔了氣，握着胸口道：「怪道金釧兒和鶯兒鬼鬼祟祟的只是笑，這必是他們倆人悄悄兒的幹下的勾當。」回頭看時，只見金釧兒、鶯兒早笑的動彈不得了。（『續紅樓夢』第二十四卷）

これは寶玉と晴雯が体を抜け出して太虚幻境へ赴いている時に、金釧兒らが二人の衣服を脱がしてしまう場面である。何も知らずにやってきた寶釵と黛玉は部屋に炭火が煌煌と焚かれているわけを尋ねるが鶯兒らは笑って答えない。帳をあげてみるとそこには衣服を脱がされた二人が横たわっていて、炭火は彼らのために焚かれたものの、そのうち二人も目が醒める、というものである。本筋とは関係のないこういったふざけやじょうだんをふくんだ話が『續紅樓夢』に“輕み”を加えていると考えられる。

しかし『續紅樓夢』の人間の業や人間社会の重圧を取り除いたこと、つまり真剣に人生問題を扱わなかった事、また「前作一」とは逆に“輕み”のもたらす雰囲気や『續紅樓夢』に文学的限界をもたらししたとも考えられる。

おわりに

本稿は「前作」との関係と『續紅樓夢』の作風について考察してきた。秦子忱の「前作」に対する不満や反発心が『續紅樓夢』を執筆させることになった。一つには寶玉・黛玉の情縁を成し遂げさせる事で

あり、一つには「前作二」が秦子忱の考えにそぐわなかったからである。

秦子忱は続書とは「蓋續者續前書也、原不宜妄意增添。」であるべきだと明記している。そのために人物設定を「前作一」の人物にこだわった。そして三世界（人界・地府・太虚幻境）を設定する事でそれを可能にしたのである。さらに人物だけではなくその題材をも「前作一」にこだわった秦子忱は、「前作一」の多くの逸話を『續紅樓夢』に取り出し、その当時語られなかった事や後日談を描いた。そして『續紅樓夢』全体に繰り広げられている調和への指向は「前作一」に見られた人間の業、人間社会の重圧といったものを取り除き、諧謔性と“輕み”を前面に押し出すこととなった。

これは秦子忱が続書は前書に続くものという考えで、「前作一」の人物や逸話をそのまま『續紅樓夢』に取り出し、あえて「前作一」の枠に留まり意識的に踏み越えないようにしたからである。寶玉・黛玉の情縁を成し遂げさせることを本筋として、「前作一」での矛盾を調和し、小さな逸話を取り上げ、諧謔性を織り交ぜることで本筋を彩った作品だと考える。

〔注〕

- （1）李漁による「三国志演義序」（阿衡堂刊本）に「嘗聞吳郡馮子猶、賞称宇内四大奇書、曰《三国》、《水滸》、《西遊》及《金瓶梅》四種。余亦喜其賞称爲近是。（略）」とある。

(ふじた たかよ

文学研究科中国文学専攻博士後期課程)

(指導: 荒木 猛 教授)

二〇〇三年十月十五日受理

- (2) 天津出版社、一九九九年刊。
- (3) 天津古籍出版社、一九九七年刊。
- (4) 『清人室名別稱字號索引』(増補本) 二〇〇一年刊。
- (5) 鄭師靖著。鄭師靖、鄭虎文の孫。生没年不明。
- (6) 先行論文「注(1)」参照。
- (7) 浙江図書館蔵、嘉慶己未抱甕軒本の影印。(見返し「嘉慶己未新葉、續紅樓夢、抱甕軒」、鄭師靖の「序」、譚溱の「題詞」、秦子忱の「續紅樓夢弁言」、題詞、「續紅樓夢凡例」六條、「續紅樓夢目録」三十卷有り)。またこの他に、一九八八年北京大学出版社《紅樓夢資料叢書・統書》『續紅樓夢』も参考資料にした。これは、北京大学図書館蔵、嘉慶己未抱甕軒刊本の排印である(見返し「嘉慶己未新葉、續紅樓夢、抱甕軒」、鄭師靖の「序」、譚溱の「題詞」、秦子忱の「續紅樓夢弁言」、題詞、「續紅樓夢凡例」六條、「續紅樓夢目録」三十卷有り)。
- (8) 『紅樓夢』の續書『後紅樓夢』の出現について(『中国言語文化研究会』第2号)
- (9) 昔からこれを焚くと亡くなった親族に会うことができるという名香で、蘇軾の「岐亭道上見梅花、戲贈季常」(蘇軾詩集卷二十一所収)の「蕙死蘭枯菊亦摧、返魂香入嶺頭梅」という詩句につけられた王文誥の注に「李夫人死、漢武帝念之不已、乃令方士作返魂香燒之、夫人乃降」と見える。また明の周嘉胄の「香乘」巻八にも「返魂香(略)香氣聞數百里。死者在地聞香氣、即活。不復亡也。(略)」と見える。しかし、「尋夢香」は今のところどの書にも見つからない。恐らく秦子忱の創作かと考えられる。

(10) 先行論文「注(2)」参照。